

第3回

手のひらにのる幸せ

まばゆいばかりの夕陽が美しい 稲刈り後の田んぼ

受け継いでゆく営みを大切にしたい

河瀬直美 (映画監督)

故郷・奈良で農作業に取り組んでいる河瀬直美さん。7年目になる米作りで仲間たち、息子さん、その友人たちと一緒に稲刈りを行いました。少しでも多くの子どもたちにお米のできる過程を体験してもらい、自分で作ったお米を食べることで農業に親しみを持ってもらい、大地から得られる恵みに感謝する気持ちが育まれ、丁寧な農業従事者が誕生することを夢見ています。収穫の秋を迎え、河瀬直美さんに稲刈りの田んぼで感じたことをつづっていただきました。



左／好天に恵まれた稲刈り 右／友と一緒にいい汗をかいた (写真はいずれも河瀬さん提供)

今年も恒例、稲刈りの季節がやってきた。お借りしている田んぼがある地域は10月に入ると稲を刈り始める。なら国際映画祭の準備や開催そのものにかかりっきりで、夏の手入れをほとんどできなかった畑を整え、冬野菜を植え付けに行った10月頭の週末。お隣の田んぼでは稲刈り機にまたがった男性が収穫の喜びを隠せず一緒に居た男性数名と雄叫びおたけを上げながら作業いそに勤しんでいた。

ああ、新米の季節だ、と思う。かつて家族総出

で収穫の喜びを分かち合った頃、この実りに感謝することがどれほどのことだったのか。全国各地に今も残る収穫祭の行事がそれを物語っている。今はお金を払えばそれらが買える時代となり、あの頃の喜びとは少し違ったものとなった。それでも、食欲の秋。夏の暑い陽射しひざに堪えた植物たちが、秋の風を感じる頃からぐんぐんと生長を始め、果実をたわわに実らせる。

今年は例年にも増して酷暑が続いた。我が家の

庭の花達も朝晩水やりをしても追いつかないくらいだった。それが9月になった頃から花の勢いがつきはじめた。『殯の森』のロケ地となった奈良市東部の山間地では通常収穫できる高原野菜がこの暑さで収穫量が極端に減ったと聞く。これでは、この地域も亜熱帯と言わざるを得ないと嘆いていた。今年が特別なのか、この先も気候は変化したままなのか、未来は誰にもわからない。だからこそ、その時々への対応が必要とされる。専業農家で気候に左右され、収穫量によって収入が変化してしまう仕事はお金の部分だけ見れば不安定だ。その不安定を安定に変えてゆく施策は必要だろう。

先頃、フランスのプロバンス地方のオリーブ農家さんを取材した際に、地元の世界企業が継続的な契約を彼らと結び、収量の如何にかかわらず、一定の収益を与える方法を確立していた。そのことにより古くからある農家が自立してゆく道が開かれている。その企業は代理店を入れず、直接企業の社員が農家の方と交渉し、共に良質なオリーブを作る方法を模索している。企業側の担当の方にお話をお伺いすると、実は実家も農業をして生計を立てているという。しかし、実際農家だけで暮らしてゆくには大変難しい現実を彼らご両親を通して見てきた。その想いが今の仕事につながっているのだという。

今年で7年目になる米作り。少しでも多くの子供たちにお米のできる過程を体験してもらい、自らが作ったお米を食べることで、農業に対する親しみを持ってもらえたらと思う。ひいては、大地から得られる恵み、そのことに感謝する気持ち、それらが育まれ、丁寧な農業従事者が誕生することも夢みている。

さて、朝から始まった稲刈りには総勢20名程の大人が参加し、一番大きな田んぼを2時間程かけてようやく刈り取り、はざかけすることができた。タイミングよくおにぎりや飲み物の差し入れが届き、田の畦で少しばかりの休息。このひとときが最高だ。好天に恵まれ赤とんぼが飛び交う秋の日、友と過ごすいい汗をかく時間。歩き始めたばかりの幼子も大地を踏みしめ両の手を空高く掲げている。



歩き始めたばかりの幼子

今年14歳の息子の友人たちが文化祭関連の作業が学校であり、この日の午前中、稲刈りに参加できなくなっていた。大人たちは日頃の運動不足もあって2枚の田んぼを刈り取ることで精一杯、バーベキュータイムを間に挟んで子供たちの参加を待った。ふと一息ついて周りを見渡すとほとんどが40代の大人たち。ああ、こうして子供たちに体力も気力も負ける日が来るのだと自覚する。バーベキュー後は、子供たちの参戦があり、あっという間に最後の田んぼは刈り取られた。はざかけも無事終わると、まばゆいばかりの夕陽が皆を照らした。美しいと思う。世界が神々しく愛おしくなる。また明日から頑張ろうと思う。

こうして、受け継いでゆく営みを大切にしたい。2週間後、脱穀を経て、自分たちが作ったお米を薪で焚いて食す。子供たちの口から笑顔で「美味しい」という言葉が聞かれるのが楽しみだ。

かわせ・なおみ

生まれ育った奈良を拠点に映画を創り続ける。一貫した「リアリティー」の追求はドキュメンタリー・フィクションの域を越えて、カンヌ国際映画祭をはじめ、世界各国の映画祭での受賞多数。代表作は『萌の朱雀』『殯の森』『玄牝』『あん』など。世界に表現活動の場を広げながらも故郷奈良にて、2010年から「なら国際映画祭」を立ち上げ、後進の育成にも力を入れる。今年第5回を開催。2018年、最新作『Vision』（主演：ジュリエット・ピノシユ、永瀬正敏）が世界公開。また、11月23日よりバリ・ボンビドウセンターにて、大々的な河瀬直美展を開催中。2020年東京オリンピック公式映画監督に就任。映画監督の他、CM演出、エッセー執筆などジャンルにこだわらず表現活動を続け、プライベートでは野菜やお米を作る一児の母。

●公式サイト www.kawasenaomi.com

●公式ツイッターアカウント @KawaseNAOMI

